

第20回 山梨県介護老人保健施設大会抄録用紙

演 題	家族と共に看取る
副 題	チームで力を合わせ最後の時を考える

フリガナ	カイゴロウジンホケンシセツ ノイエス
施 設 名	介護老人保健施設 ノイエス
フリガナ	ナガサワ リョウタ
発表者(職名・氏名)	長澤 良太 (支援相談員)
フリガナ	オガワ ジュンコ
共同研究者	小川 純子

<はじめに>

社会的にも、死を迎える選択肢の場所として医療機関以外の介護施設等が選ばれている状況の中、その人なりの穏やかに、充実した最期を迎える事ができる介護、看護が求められています。ご家族の安心と充実感、スタッフの達成感を得る事のできた他職種連携による当施設での看取り支援の取り組みを報告します。

<方法>

当施設での看取りについては「人員不足」又は「他の利用者への影響」などが理由で、近年まで積極的には取り組んでいませんでした。併設する有床診療所や他の医療機関への転院など、医療を重視した支援を主に行っていました。そこで看取り支援を行うにあたりご家族の要望をお聞きする事から始めた。ご家族の思いとしては「無理な延命は望まない」「苦しい思いはさせたくない」などの声が多くきかれた。同時に医師、看護師、介護福祉士、管理栄養士、理学療法士、作業療法士、施設ケアマネ、支援相談員で看取りチームを構成し、どのような支援が行えるか検討しました。検討の段階で「ご家族の意向をどこまで支援できるのか？」というスタッフからの疑問の声が上がりました。そこで医師より、ご本人やご家族に対しインフォームドコンセント（IC）を行い病状説明と当施設でできる医療行為を含めた支援方法を説明した。説明により支援内容などを理解、納得していただいた上で同意書に署名していただき、ご家族にも同意書の控えを渡し、施設ではカルテ内に同意書を入れ、いつでもスタッフがご家族の意向を確認できるように情報の共有にあたりました。このICが看取りチームケアの構築に際し重要な過程であると気づくとともに、ご家族との信頼関係を得る事となりました。支援方法やご家族の意向に変更があった場合、確認のために定期的に担当者会議を行いその時応じたケアを看取りチーム一丸となって取り組みました。

<結果>

亡くなられた利用者様のご家族から「苦しむ事が少なく、家族や施設の方に見守られ天寿を全うできた」「亡くなる前日や当日も最後の時間を共に過ごすことができ感謝しています。」「在宅酸素を使い一時帰宅を支援してもらえた」と多くの声をいただく事ができた。スタッフからも「苦しみを軽減するプラン目標への取り組みを他職種と連携し支援できた」などの声がきかれた。

<まとめ>

看取り支援における、緩和ケア、終末期ケアはご本人の意向を尊重し、身体的、精神的、社会的、霊的苦痛（スピリチュアル・ペイン）を可能な限り緩和し、その人らしい最期を迎えられるようなサービス提供をするといわれています。当施設では他職種で看取りチームとして支援する事で、その人らしい最期を迎えられるプランを実践する事ができました。